
しゅーしょくぶ！

ゲキガンガー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

しゅーしょくぶ！

【Nコード】

N0640Z

【作者名】

ゲキガンガー

【あらすじ】

大卒内定率が三割を切る時代。高校生の時から就職活動をするのが普通の時代になっていた。

そんな中、極度のあがり症の高校生、深谷佑介は、片思いの相手、河合英梨がコンビニで働いている事から、お近づきになりたいとコンビニのアルバイトを志望する。そして、コンビニの面接を受けるのだが。練習で受けたコンビニもあえなく落ちる。

そんな中、学校で『修職部』という、部活を見つける。

佑介はその部を訪れるのだが。

前代未聞かはわからないけど、就職活動ラブコメディ。

実的な知識や、失敗談、成功談とかも、盛り込めたらいいな、
というのが作者の希望。

しゅーしょくぶ！ ? (前書き)

かなりマニアックなネタというか。

就職活動×ラブコメ。

という、割と奇抜なネタですので、人選ぶと思いますが、もし読まれた方がいれば感想など書いて頂ければ嬉しいです。

ただし、修正は完結してからに、基本的にします。

コンスタンスに書いて、何とか完結させていきたいです。

しゅーしょくぶ！ ？

しゅーしょくぶ！ 正しい就職活動の始め方
作ゲキガンガー

履歴書。

氏名。 ふかやゆうすけ 深谷佑介

住所。 x x x。

電話番号。 x x x。

経歴。

2005年生。

2010年。 小学校入学。

2016年。 中学入学。

2016年。 高校入学。

職歴なし。

特技。 空気を読む事。

部活動。 所属なし。

長所。 わかりません。 短所。 極度のあがり症なところです。

主なアピールポイント。

今までは何不自由なく生きてきましたが、これから社会に出て行く事を考えて、御社でアルバイトとして働こうと思いました。取り立てて取り柄のない人間ですが、精一杯頑張ろうと思います。

目の前にいるコンビニの店長。頭の禿げた、髪の毛一本が波平みたいに立っているおっさんが、俺の書いた履歴書に目を通している。

既に心臓はバクバクと鼓動をしている。体調がおかしい。異の中に穴が空きそうだった。

まず、履歴書を思い返して、後悔したのは、部活動に入っていないかった事。やはり、部活に入っていないのはマイナスポイントだら

うか。まず、体力以上に社交性を疑われかねない。次に、写真をス
ピード写真で撮り、乱雑に貼り付けた。寝癖を直すのを忘れ、写真
にも、きっちりそれが反映されていた。

これは面接である。だが、別に、企業の面接とか、そういうわけ
ではなかった。これは、ただのコンビニのアルバイトの面接である。
「それで、君はなんでコンビニのバイトをしようと思ったの？」

面接官となっているコンビニの店長。サーク Kの店長だった
は聞いてきた。

「それは！ その！ えーっと！ その！ えーと！ そのですね
『その』と『えーっと』しか言っていなかった。やばい、緊張のあ
まり言葉が紡げない。

店長は溜息交じりに履歴書の挟まっているファイルを閉じた。

「面接の結果は後日電話で伝えます。採用だったら電話で伝えます
が、不採用だったら連絡しません」

「わ、わかりました！」

俺は背筋を異様な程伸ばして、そう言った。

電話は来なかった。結果は不採用に終わる。

深谷佑介。賞罰なし。中高大、とエスカレートで進む学校の高等
部二年生。部活動などの所属はなし。取り立てて特徴もなく、長所
もなし。欠点なのは極度のアがり症な事。本番の時、人と接する時、
極端にあがってしまうのだ。顔は紅潮し、言葉は詰まる。典型的な
コミュニケーション能力の欠如。いわゆるコミュ障とか言われる人
種だった。

こういう性格だから、あまり友達も多くない。当然のように彼女
もない。

趣味は読書 という事になっているが、深く聞かれてもそんなに
は答えられない。愛読者は坊ちゃんという事になっている。どんな内
容だったかはあまり覚えていない。

こんな俺でも、恋をする。恋をする資格は誰にでもあるはずだ。

そう、職業選択の自由と同じく、恋愛の自由も憲法で認められているはずだ。認められているのは婚姻だった気はするけど。

相手の名前は河合英梨。

明るい性格の、クラスのムードメーカー。彼女は、部活には入っていないが、運動神経が良いので、各部活から引つ張りだこの人気ものだ。部活に入っていないのは、アルバイトで忙しいからだそうだ。

そんな彼女はコンビニのアルバイトをしている。サーク K ではない。ファミリ マートだ。

クラスでは接点がない彼女だが、もし、同じバイトとして働ければ、急接近のチャンスになるかもしれない。きっと、話す機会も増えるだろう。普段はあがって言えない事も、彼女に言えるようになるかもしれない。

そんなさもしい感情を抱えて、俺はコンビニのアルバイトを志望した。

しかし、練習で受けたサーク K も、見事に不採用。

それも当然だった。今は大卒内定率が三割を切る大不況時代だ。

コンビニのアルバイトでも、十倍以上の競争率がある。

そんな中、俺みたいな奴が採用されるはずがない。

本番となるファミリ マートの面接まで、あまり日は残されていないなかった。

俺は溜息を吐く。

そんなある日の事だった。学校で一枚のビラを発見する。

『修職部』

という文字だった。

活動内容。自己分析、面接練習、グループディスカッションの対策、など、表面的な就職活動に対する対策だけでなく、本当の意味での、職を修める事を目的とする部活動。

修職？ 就職じゃなくて？

何と無く、その違いに興味を持った俺は、その部の名前が書いて

あるところを訪ねる事にした。

ジョー・ジョーグー！？（前書き）

とりあえずコンスタンスに投下していきます。一日一シーンくら
いずし。

しゅーしょくぶ！ ？

「失礼します」

コンコン、と二回ノックした末に、ドアを開け、部屋に入る。

「あれ……誰もいない？」

ある意味、ほっと胸を撫で下ろす。ドアをノックするだけで緊張したのだ。人に会うとなるともつと緊張する。それじゃダメなのはわかっているのだが。

部屋に入っても反応はなかった。

中には校長室の机みたいな机。

そして、なぜかクローゼットがあった。

ここは部室のはずなのだが、誰かの私室のようになっていた。

「なんだろうこれは？」

僕は好奇心に負けて、クローゼットを開ける。中には何着ものりクルートスーツ。女性用のものだ。が、綺麗に並んでいた。

クローゼットの下は、普通の箆笥みたいになっていた。

何と無く開けてしまう。

中に入ったのは、小さく包まれた、ハンカチのようなものだった。

何と無く、紫色の包を手取る。

ほろり、と、包が解けた。

「これって……」

パンツだった。勿論女性用の下着のパンツ。

「随分と大胆な下着泥棒だな」

びくつ、として振り返ると、ドアの手前には一人の女子生徒が立っていた。僕がその女子生徒を、女子生徒だと判断出来たのは、灰色のブレザーの制服と、チェックのスカートを穿いていたからだ。大人びた雰囲気、内側にカールさせたような、大人びた髪型。身長も高く、ポロポーションも抜群だった。

そのままリクルートスーツを着ていたら、やり手のビジネスウー

マンドと認識していたかもしれない。理知的な双眸をしているので、眼鏡でもかけたら、個人指導でもして欲しくなる、女教師になりそうだった。

「これは！ 違うんです！ これは！」

何が違うのかは説明できなかったが、僕は両手をぶんぶん振って、言い訳をした。

「パンツを握ったままで反論されても説得力がないが　まあいい」
溜息を吐きつつ、女生徒は切り出した。

「恐らく　というよりは間違いなくだが、君は修職部に入りきたのだろう？」

「え？ はい。そうです」

僕は一応、落ち着きを取り戻しつつある。

「自己紹介が遅れたな。私は中川唯と言う。これが名刺だ」

「はあ……」

名刺にも受け取り方があるらしいのだが、僕はよくわからなかった。とりあえず、片手で受け取るのは失礼そうなので、両手で受け取っておいた。

人材コンサルタント業修職部講師。

なかがわゆい
中川結衣

名刺の下には、電話番号とメールアドレスが書いてある。個人情報_の為_に秘匿するが。

「それで、君の名はなんという？」

「その……深谷佑介です」

「そうか……良い名だ。それで、話をする前にして欲しい事があるのだが　とりあえず」

中川さんは、じとーっとした目で僕を見る。

「手に持っているパンツを置いて貰えないか？」

しゅーしょくぶ！ ? (前書き)

一日一回更新が目標。とりあえず、コンスタンスに書き続けます。

しゅーしょくぶ！ ？

この部屋には、来客用にソファも用意されていた。そこに座り、お茶も振る舞われる事になる。

「それで、君はどうして我が部を訪れたのだ？」

中川さんはお茶をすすりつつ、そう言った。いざ面と向かうと、

中川さんは美人だし、思わず緊張してしまう。

「その！ 自分は、あがり症でして、面接の時にそれを克服しようと、思った次第であります」

しまった。思わず、緊張し過ぎて、何か体育会系の後輩か、軍隊みたいな受け答えになってしまった。

「……そうか。君はあがり症なのか」

「はい！ 先日も、コンビニのバイトの面接で落ちたばかりでして「なるほど……」

「ところで、先輩。修職とは一体どういう意味なのでしょう？」

「なんだ。そんな事か。説明しよう。修職とは、字の通り、修める職と書く。普通は就職と書く。だが、これは会社に入るまでの事だ。重要なのは、会社に入ってから、ひいては、職というものを修める事を目的とする、それが我が部のモットーだ。つまりは、入れるだけが終わらない、一生役立つものにしよう、という事だ」

「はあ……」

なんかよくわからないが、凄そうである。

「それで、深谷君。君は来年高三になるな」

「はい。そうですけど」

「就職活動をする気なのか？」

「僕は内部進学ですし、大学行くつもりですから、そんな先の事は後になって考えればいいかなーって」

「甘い！」

中川さんは叫ぶ。僕はびっくりして、思わずのけぞってしまふ。

「君は今の大学内定率を知っているだろうか？」

「そうですね。三割だとか」

「そう、三割。プロ野球のバッター並の打率だ。大学まで行っても三割しか就職できないのだ。そんな中、就職活動に新たな動きが出ている」

「新たな動き？」

「就職活動の超早期化。つまり、我々のような受験を必要とせずに進学する者を対象に、早期に優秀な学生を確保しようとする動きが出ている。2012年あたりに、ユニクロの会社、ファーストリディングが、大学一年生から内定を出す動きを見せたのをきっかけに、各社がそれに便乗、今では、どの企業も、その流れに負けないようにと早期化を進める。そうなった上で、高校二年生から、高校三年生の期間に就職活動の時期がずれる、就職活動の超早期化がはじまったのだ」

「はあ……」

それで先輩達はあせっていたわけか。今では、高校の授業でもリクルートスーツを着て受ける人も増え、高校側もそれを容認している。

「というわけで、君は逼迫した状況に置かれている、というわけだよ」

お茶を飲み欲し、机に置く中川さん。

「とりあえず」

中川さんは身を乗り出してきた。そして、顔を物凄く近づけてくる。

「君のそのアピアランスはなんだ？」

「アピアランス？」

「身だしなみの事だ。身だしなみの。まず、この髭のソリ残し」
そう言っつて、僕の顎を指差す。

「次に、このネクタイ。長さがバラバラじゃないか。長すぎる」
僕のネクタイは、ベルトより下に届く位長かった。

「それに、シャツも皺くちやだ。ちゃんとアイロンがけをしる」

「……はは。人間、中身が重要じゃないかなって」

僕は見苦しい言い訳をする。

「その考えがまず甘い。良いか、人間というのはまず見た目で判断されるんだ。ある研究によると、第一印象は五割が視覚。三割が聴覚。一割が言葉遣い。後はその他。で、判断されるといふ。人間といふのは、まず見た目で人を判断するんだ。中身なんてものは、その場では判断できないからな。まず、見た目でその人と関わるかどうかが決まる。どんなに中身がよくても、関わりを持たれなかつたら伝えようがないだろう」

「はあ……」

もっともな正論すぎて、僕は反論できなかつた。

「そんなのでは、女の子にも嫌われる」

ギクツと。

ハートを矢で貫かれたような衝撃を受ける。

「ん？ どうした？」

「いえ、何でもありません」

「ははーん。そういう事か」

したり顔で、何かを察した様子だった。

「君に恋人はいない。だが、想い人はいる、そんなところか」

「な！」

凶星だった。

「そして、君のような人間がアルバイトをしようなどという殊勝な考えを抱くのは、何か裏があると見るのが妥当だ。恐らく、そのバイト先に、君の想い人が勤めていると見るのが妥当であろう」

筒抜けだった。どれだけ洞察力に飛んだ人なのだろう。この中川さんという人は。

「……その通りです。僕はそのバイト先に好きな人がいて、その人に近づこうと」

「中々に初々しくて良い。いいだろう。君の修職。私が面倒を見て

やるっ」

「本当ですか？」

「ああ。本当だ。だが、とりあえずは、うちに帰って、髭を添って、明日から出直してこい。私は無精な人間は嫌いなのだ」

しゅーしょくぶ！ ? (前書き)

一日。一シーン位ずつ更新。

とりあえず、書き続ける事と書き上げる事が重要です。どんな駄作であつても、前に進む原動力となるはずでしょう。多分ですけど。

しゅーしょくぶ！？

とりあえず、家に帰った僕は髭を剃り、鏡でネクタイをチェックする。時刻は夜である。時間帯を見計らう。大体、彼女はこの位の時間に働いている。

俺は自転車を漕いで、向かう。三十分程漕いだ先に、目当てのコンビニはあった。

ファミリ マートだ。夜でも、燦々と輝いている。

外からこっそり中を覗く。

いた。

河合英梨。

明るくて天真爛漫。クラスのムードメーカーの女子。

俺にとってはまごう事なき天使だった。

一年の頃から同じクラスだけど、話した事はまだ数回だけだ。一方的な片想い、なんだろうな、やっぱり。

彼女は俺と同じく部活動に入っていないが、それには理由がある。彼女の家庭はそれほど裕福ではないらしく、私立高校、大学というのは、それなりにお金がかかる。

彼女は両親の負担を軽減すべく、アルバイトをしなければならぬ。何とも健気な事だった。

裕福な親の下で、ぬくぬくと育ってきた自分が恥ずかしい。

こっそり、外から中を見続けていても怪しまれるので、俺は意を決して中に入る。ただし、気づかれないように、レジからは死角になるように中に入る。そして、適当に漫画本を読みつつ、頃合いを見て、適当にスナック菓子を手にとって、レジへ向かった。

「いらっしやませ！」

笑顔で言ってくる河合。いや、ここは英梨と呼ぼう。英梨。

セミロングの髪を後ろで纏めて、健康的で活動的な笑顔を浮かべている。

彼女の笑顔は、人を幸せにする笑顔だ。
なんとというか、まさしく、天使だった。少なからず俺にとっては、今は学校の制服ではなく、ファミリ マートの制服を着ているが、制服姿もそれはそれで、ものすごくキュートなのだ。

クラスのアイドルというわけでもない。彼女位可愛い人なら、鼻屑目をしなければ、何人かはいるだろう。だけど、俺にとっては、彼女が一番だった。

目の前にいるだけで、心臓が高鳴る。こういうのは理屈じゃないだろう。恋に理由などいらぬ。

この場で告白出来るだけの度胸があればどれだけいい事だろう。だが、今は緊張のあまり、喋る事すらままならない。視線を合す事すら。

「あれ？ 深谷君」

流石に、クラスメイトの名前は憶えていてくれたようだ。その事にさえ、俺は感動を覚えざるを得ない。

「……河合か」

目を逸らしつつ言う。無愛想だが、仕方がない。目を合わせられないのだ。彼女があまりにも眩しすぎて。

「よく来るね。このコンビニ」

「……まあ、まあな」

覚えられていた。流石に通い過ぎたか。

「家から近いの？ ここ」

「ああ。結構近い」

本当は、ここに来るまで自転車で三十分かかる。ここに来るまで、何十件とコンビニを素通りしてきたのだ。

「へえー、そうなんだー」

「ところでさ。河合」

「ふえ？」

「ここってさ、まだバイトの募集とかしてるか？」

「しているとと思うけど、店長に聞いてみない事にはわからない」

「そうか。また電話してみる」

「うちで働くの？ 深谷君」

「ああ。うちから近いし（本当は遠いけど）。俺も何かバイトとか始めようと思って」

「そうなんだ。もし一緒に働く事になったら、一緒に頑張ろうね」

英梨は笑顔で言った。

うお〜。

その笑顔だけで、ご飯が何倍も食べそうな気分だった。

英梨は手早く会計を済ませてくれて、レジ袋にスナック菓子を入れてくれた。あまり長居をするわけにもいかない、他の客の迷惑にもなるし。その日は大人しく帰宅した。

ジョーショクぶー！？（前書き）

ちよこちよこ更新。一日一回は更新する予定です。

しゅーしょくぶ！ ？

翌日の朝の事。

俺は制服に着替え、髭を剃り、ネクタイを締める。俺は新たな決意と共に、身支度を整えていた。朝のニュースでも、毎度の事ながら、大学生の就職率についてのニュースが流れている。過去最低を更新、世情は決して甘くはなかった。そういつた中、やはり身なりというものは、とても重要なものだ。

「おはよー。兄さん。ねむねむ」

起きてきたのは、妹の佑香^{ゆか}だった。

だらしない事に、寝癖がついている。目には、くまが出来ている。取り立てて言う事のない、普通の妹である。ある一点を除けば。

「おはよう……って、お前またネトゲやってたのか」

「いやー、なかなか欲しいアイテムがなくてね」

「後、この前、すげー金額の請求がきて、母さん驚いてたぞ」

「欲しいアイテムが出なかつたら、課金は当然の事じゃない！」

「いいから、後で母さんに謝っておけよ」

俺は溜息を吐いた。

妹の佑香は、廃人的なネトゲユーザーだ。ネットゲームというものは、基本的に無料でプレイできるが、勝ったり、レアなアイテムを手に入れるには、時間と労力、それからお金がかかる。ゲーム内での功名心を満たす為には、みつつのうちのどれ、あるいは全部が必要だ。

妹の佑香は家から帰ってくると、ひたすらにネットゲームをする毎日だ。一応、ゲーム同好会とかいう、趣味的な部活動も同好会には入っているらしいのだが。まあ、なんにせよ、緩い部活だろう。

「それより、兄さんは何やってるの？ まるでこれから就職活動を始める大学生のように、熱心に鏡を見てネクタイを締めてるんです

けど」

「まあ、そうだな。はじめるんだよ。就職活動。つつたつて、バイトだけだな」

「アルバイト！ あのキングオブニート。将来ニートになる事間違いなし、とあたしの中で思っていたあの兄さんが。ニート予備軍の大將の兄さんが。これは天変地異が起こる前触れ？ 雨あられが振ってくるのしか」

佑香は大げさに驚く。

「ネトゲ廃人のお前にそこまで言われる言われはないぞ」

「けど私、感心しちゃったよ。兄さんも成長したんだね」

「お前こそ他人事じゃないだろ。お前こそ、うちだつて裕福じゃないんだし、アルバイトのひとつでもしろ。でなきゃネトゲやめろ」

「そんな！ あたしに死ねと言っの兄さん！」

佑香は叫ぶ。

「そうまでは言ってないが」

「あたしは一日ネトゲをしないと死ぬ特殊体質なんだよ！」

そんな特殊体質絶対に嘘だ。俺は溜息をついて、

「それに、お前だつて遅かれ早かれ将来の事決めなきゃいけないんだ。そんな事じゃ先が思いやられるぞ」

「先？ 将来？ あたしがやりたいものは決まっているよ」

「なんなんだ？」

漠然と、将来は就職活動して一般企業に勤める、くらいしか考えていなかった（とはいえ、今のご時世正社員になれるのは一部の限られた人間ではある）俺からすれば、具体的になりたいものがある妹の方が、ちゃんとしているのかもしれない。

「家事手伝い！」

笑顔で答える。

人それをニートと言う。女性のみに許されるニート、それが家事手伝い。

「あたし！ それか結婚して、専業主婦になるよ！」

「お前みたいな奴貰ってくれる奴がいるかよ」

「そうだね。いなかったら、兄さん」

「なんだよ？」

「兄さんがあたしを養ってね」

思わずドキッとしてしまふような言い回しだった。ただの妹のはずなのに。

「だから、兄さん。頑張って就職活動をして、正社員になるの。そして、あたしを養ってね」

「馬鹿な事言ってるんで、お前も早く着替える」

俺は頭を振って、そう言う。

「えー。これからネットゲ仲間と狩りに行く約束なのにー」

「流石に学校は行け」

しばらくして、母親が作った朝食を食べて、学校へ向かう。

しゅーしょくぶ！ ? (前書き)

ちよこちよこアップ。

基本的に？シーンずつアップ。

しゅーしょくぶ！ ？

朝のホームルームの事だった。担任の教師が入ってくる。

シヨートカットの女教師。田中先生（未婚）だ。担当している学科は数学。田中先生が入ってくると同時に、クラスメイトは席につき、静まり返る。

朝のホームルームが始まる事になる。

「本日皆さんにお話したい事は、昨今の就職活動についてです」
就職活動。進学校ではない高校だったら、高卒で就職活動をするのもわかるが、今は大学全入時代だ。就職活動と言われても、ピンとこないものも多いだらう。

「皆さんは、ほぼ全員が付属校の大学に行くと思います。ですが、そんな中でも、先輩達の中には、就職活動をする人達がいるようです。勿論、就職協定に違反するとの声もありますが、現在では学校側も黙認しています」

それだけ、世情が逼迫しているという事もあるんだらう。

「皆さんの中にも、就職活動をしようという人もいるかもしれませんが、ですが、これだけは言っておきます。将来自分がどうなりたいか、それを地に足をつけて考えない事には始まりません。勉強というものは、そういったものを考える礎となります。皆さんも、就職について心配する事も結構ですが、学生としての本分を忘れないように、勉学に励んでください」

朝のホームルームの内容は、最近の就職活動について、だった。

将来なりたい自分……か。

漠然とした考えしか浮かばなかった。

バラ色の未来が描けるとは言い難い。ニュースでは最近の不況が常に映し出され、先輩達の声も明るいものは少ない。

ニートやフリーター問題、派遣社員の問題。などなど、社会には

明るいニユースが少なかった。

そんな中、具体的にどういう風になりたいかを描くのは困難だった。ただ、大卒内定率を考えると、なんとしても内定して、正社員にならなければならぬ気がする。

「なあ……ロッキー」

目の前にいるガタイの偉く良い男。とはいえ、ガタイに対して、身長は大して高くなかった。俺の友人の堀川大悟と言う。

相性はロッキー。

なぜロッキーかと言うと、後で説明する。

「なんだ？」

「お前は将来どうなりたいんだ？」

「世界チャンピオン」

即答だった。

ロッキー、こと堀川大悟は、高校生にして、現役のプロボクサーだ。プロライセンスを取得、正確に言えば、まだデビュー戦前で、プロとははつきり言い難いらしいが。四回戦という、最初のランクらしい。階級はジュニアフェザー級、どちらかという、軽量級に属する。

そんな彼の夢は世界チャンピオンだ。

ついたあだ名はロッキー。映画のロッキーからとったものだ。

いや、ロッキーマルシアノのロッキーかもしれない。詳しくははじめの一步の十巻あたりに書いてある。

「だよな。やつぱり……」

そういう事即答できるのは、男らしいし、憧れるところでもある。

「お前はどんなんだよ？」

「俺？ 俺は」

よくわからない。だけど、将来の事考えはじめなきゃいけない時期に差し掛かっているんだろう。高校二年生でも、本来なら義務教育なんてとっくに終了している年齢だ。

その為に、就職活動をしなきゃいけないのかもしれない。

しゅーしょくぶ！ ? (前書き)

一日一回更新してきましたいですね。
それだけです。

しゅーしょくぶ！ ？

「ふっ、よく来たな、深谷君」

手を前に突き出したようなポーズで迎える中川さん。なぜか制服ではなく、リクルートスーツを着ていた。ともかく。

「髭もちゃんと剃ってきて、アピアランスも整えてきたようだな」

「ええ……まあ」

「それは、我が修職部に入る決心が出来たと見たいいなだな？」

まあ、そういう事なのかもしれない。

「けど、アルバイトの面接だけいいんですか？ その、修職部に入るのは」

「構わないよ。アルバイトの面接もまた、修職の一環だ。要は雇用形態の違いに過ぎない」

「はあ……」

何だか、俺にとってはよくわからない事だった。まだ社会に出て働くという事が縁遠いという事と感じている事もあるのかもしれない。

「それでは、これから面接の準備をしていこう。アルバイトといっても、昔と違って今では難関だ。それなりに倍率も高い。就職率が悪くなって、フリーターになる若者が増え、加えて、大学に行く学生はさらに増えている。必然的に学費もかさみ、親の援助をする為にバイトに明け暮れる学生も多い。それなりの対策も必要になってくる。とりあえずは、この項目を生めてみてくれたまえ」

僕は一枚の紙を渡される。

いくつかの項目がある。

「これは？」

「まあ、自己分析という奴だ。面接の時アピールしようにも、自分の事を知らなければ何も出来ないだろう？」

『学生時代に頑張った事』

特になし。

……でいいのか？

『自分の長所。短所』

長所……よくわからねえ。

短所……本番に弱いところ、あがり症なところ。

『趣味について』

読書って事にしてる。一応。多少はゲームもやるんだけど、そういう事言うのはあまりよくないよなやっぱり。

『座右の銘』

健康第一。

いや、これは座右の銘か。

「……中々に苦戦しているようだな」

「はい……」

いかに自分という存在と向き合ってたかかわかる。要は、なあなあでも今まで生きてこれたからだ。高校受験も経験していないし、自分の人生を決めるような決断を今までできていない。それは、自分と向き合う機会を持ってこなかったという事でもある気がする。

「安心しろ。誰もが最初は君のようなものだ。自己分析で必要なのは、内向きな視点だけではなく、外向きな視点からも見るものだ」

「外向きな視点？」

「内向きな視点とは、すなわち、自己評価だ。例えば、『自分は真面目で素直』だと思っていたとしよう、しかし他人は『あいつは不真面目な奴だ』と知っている場合もある。前者は自己評価、後者は他者評価。どちらが正しいという事もないが、どちらの視点からも見る事が大切だ。まあ、往々にして、人間というのは自己を過大評価するきらいがあるから、他者評価の方が実態像に近い場合が多いのだが……」

「はあ……」

「ともかく、自己分析というものは、自分だけでは成立しないのだ。

とりあえず、知り合いや友人、家族などに聞いてみるのが大切だ。今日のところはこれで終了。次に来る時までには、他者から評価を受けにくる事」

とりあえず、その日の指導はそれで終わったようだ。

自己分析。

俺は家に帰ってから、居間の机でチェックシートと睨めっこをしていた。

考えても考えても、自分というものがよくわからない。

「にはははははは！」

妹の佑香は珍しく、居間で漫画雑誌を読んでいる。だらけて寝そべりながら。珍しくというのは、だらけているのではない。珍しく、ネットゲームをしないで漫画を読んでいる事だ。

夕食前という事もあり、珍しく居間にいるようだ。夕食はよく、俺が部屋まで運んでやったりする。ネットゲで忙しいようだ。

「なあ……」

「にはははは！」

「おい！」

「にはははは！」

「聞けよお前」

「……なんだよ。うるさいなお兄ちゃん。今良い所なんだよ。宇宙人王子と、火星人王女、結ばれない二人の愛が、ついに結ばれようとしているシーンなんだよ」

どんな漫画だよそりゃ。

それにしたって、笑うシーンじゃないだろそれ。

「お前、俺の事どう思う？」

「は？」

「いや、だから、どう思うか聞いてるんだよ？」

「なにそれ。遠まわしな愛の告白？ 気持ち悪い。この前の事本気にしたんだ」

佑香はドン引きしていた。

「ちげーよ。自己分析だよ。自己分析」

「じこぶんせき？ なにそれ？ っていうかお兄ちゃんさつきからなにしてるの？ 珍しく勉強でもしてるの？」

「自己分析って言って、就職活動で一番最初にやる事なんだ。己を知り、敵を知れば百戦危うからず、って孫子が言ってただろ。つまり、この己を知るって事だよ」

若干の読書で、物知りになった俺は得意げに言う。

「へー。そうなんだ。あたしはお兄ちゃんの事、お兄ちゃんだなと思ってるよ。以上。終わり」

「答えになってねえ。だったら、もっと質問を具体化するぞ。俺の良いところってなんだ」

「お兄ちゃんの良いところ？ ないよ」

即答しやがった。

「誰にでもいいところはあはずだろうが！」

「ところがどっこいお兄ちゃんにはないんだよ」

「頼むから探してくれ」

「うーん。難しい問題だな。だったら……優しいところかな」

無難な事を言ってきたやがった。どうとでも解釈できるし。

「この前、お菓子買ってきてくれたしね」

「はいはい……わかったよ」

ともかく『優しい』という事を長所で書いておく。

「それで、俺の短所、ダメなところってなんだ？」

「これも難しいなあ」

「なんでだ？ 見当たらないのか？」

「ううん。多すぎて困るの。まず、だらしないでしょ。女心わかってないでしょ。キモイでしょ。後、本番必ず失敗するから頼りないし。もう全部ダメダメ」

流石にむかついて首を締めたくなった。

ともかく、俺は『だらしない』『女心がわかってない』『キモイ』

『本番に弱い』『頼りない』というキーワードを抜きだし、箇条書きする。

「ああ、ありがとよ。すげー勉強になるよ」

「後、良いところといえば、何だか養ってくれそうな、その甘いところかな。甘い蜜が吸えそう。っていうか、お兄ちゃんどうしてそんな事聞いてきたの？」

「だから、さつき言っただろ。就職活動で使うんだよ」

「え？ あのお兄ちゃんが就職活動。ってきり、あたしと同じで二一ト志望だと思ってたよ」

「あのな……二一トになったらどうやってお前を養うんだよ。もっとも、養う気なんてこれっぽちもないからな。つつたって、アルバイトの面接だけだな」

「アルバイト？ あのお兄ちゃんが。佑香はなんだか感慨深いよ。育てていた雛が空に飛び立つ日みたいな心持だよ」

お前に育てられた気はねえ。少なからず。

「それで、何のアルバイト？」

「コンビニのバイト」

「へえー。コンビニの。それで、お兄ちゃん夜中よくコンビニに行くけど、それと何か関係があるの？」

ぐっ、鋭い。これが女の勘、妹の勘か。

「……ま、まあな」

それとなく答えておく。

「ところでお兄ちゃん、あたしの知り合いの先輩がここから結構離れたところにあるコンビニでバイトしているみたいんだけど」

「へえー、それで？」

「その人がお兄ちゃんがよくコンビニに来るって話してた」

「へえ。誰なんだよそれ」

「河合さんって言うの。もしかしたらお兄ちゃん、河合さん目当てでコンビニのアルバイトしてみようなんて思ったんじゃない？」

どうしてこういう時だけ勘が異様な程鋭い。

「だと……したらどうなんだよ？」

俺は、言葉を詰まらせながら言う。

「やめた方がいいよ。気持ち悪い。ストーカーみたい」

「うるせえ、余計なお世話だ。っていうか、お前、河合と知り合いだったのか？」

「うん。先輩の友達？がりで知り合った。この前カラオケ行ったりしたんだよ」

なんと羨ましい。ともかく、このコネクションは大切にしなければならぬかもしれない。妹に媚びを売るのは癪だが。

「まあ、ともかく佑香はお兄ちゃんの実らない恋を応援するよ。ただ、捕まらない程度にね。男は引き際ってものが肝心だよ」

実らないって断言しやがった。つか、捕まるような事はしねーよ。ともかく、妹の佑香からの他者評価はこれで終了した。

しゅーしょくぶ！ ? (前書き)

ちよこちよこ更新。

やっぱり書き続ける事が重要な気がする。終わり。

しゅーしょくぶ！ ？

その日の学校での事。

丁度、放課後になったばかりの事である。帰る奴は帰り、部活に行くやつは部活に行く。

「なあ、ロッキー」

俺は前の席の友人、堀川に話しかける。

「……どうした？」

「お前、俺の事をどう思う？」

「悪い。俺ノンケなんだ」

妹と同じような反応だった。そして振られた。

「じゃなくて。変な意味じゃねーよ」

「真顔で目を見られて、どう思うか聞かれてもな」

やはり前置きをするべきだったか。

「自己分析だよ。自己分析」

「あー。自己分析か。何の事がよくわからんけど」

「就職活動で使うんだ。いいから協力してくれ」

「ああ。いいだろう」

「それじゃあ、俺の良いところと、悪いところをあげてくれ」

「良いところと、悪いところか 難しいな」

考え込む、堀川、ことロッキー。

「ねーねー。何の話してるの？」

突如として、話に割り込んできたのは英梨だった。堀川と河合は仲が良い。友人としてだと信じたいが。よくこうして話に首を突っ込んでくる。

「河合か。何だか、深谷が自己分析だとか、どうこう言って、自分の事をどう思うか聞いてきて」

「あー、馬鹿、勝手にしゃべるなロッキー」

俺は勝手にしゃべる堀川を制止しようとする。

「じごぶんせき？ なにそれ、なにそれ」

目を輝かせる英梨だった。

「じゃあ、聞くが河合。お前は自分の良いところと悪いところをなんだと考える？」

堀川はそう聞いてきた。

「うーん。良いところは元気なところかな。悪いところは、ちよつとおつちよちよいなところかも」

「ちよつとか？」

「ひどーい。これでもちよつとはましになった方だもん」

頬を膨らませ、口を尖らせる英梨。

彼女はおつちよちよい（と本人は言う）で有名だった。テストの時の答案に名前を描き忘れるのなんて序の口。料理をすれば、鍋が破裂し、未知の物体が出来る。などなど、彼女のおつちよちよいなエピソードは数知れない。バイト先でも、いつも失敗ばかりしているらしい。何度かお目にかかっている。よく釣銭を間違えるのだ。俺も多めに間違われて、返しに戻った事がある。

「それで、お前は河合の良いところと、悪いところをどう思う？」

「え？ 河合君の？」

「ちよつと待てロツキー、別に河合さんに聞く事はないだろ」

俺は声を大きくする。これは恐れからさせる行動だ。単に、知りたくないのだ。相手が俺の事を、もし興味がなかったら、それでも俺の片想いが終わってしまうかもしれない。知らなければ、片想いが続くんじゃないか、っていう、さもない考えだった。実に男らしくない。

「なんだ？ 聞きたくないのか？」

「そういうわけじゃねえけど」

男らしくなかった。我ながら実に情けない。

しばらく、考え込んだ後、英梨は、

「そんな事言われても困るよ。だって、私、深谷君とまだそんなに話してないんだから。同じクラスにいるんだけど、あまり会話らし

い会話もないし」

もつとな事を言っていた。

「そうか……ありがとな。俺、ちょっとこれから行くところがあるから」

俺はそう言っつて、その場を去った。

「ふむ。これが君の自己分析の結果か。偉くズタボロだな」

俺は完成した自己分析シートを中川先生に見せた。評価がズタボロなのは、妹の意見が主だったからだろう。

「ふむ。では、私から君の印章というものを伝えておこう。君は真面目だが、いまいち感情の表現が素直ではない。性格もあまり明るくは映らない、どちらかというところ根暗っぽく映る。行動に移す際も、どちらかというところ慎重派なはずだ。君はどこにでもいる、少しさえない普通の男子高校生だよ」

ああ、そうですか。

「なんだね。不満かね？」

「別にそういうわけじゃないですけど」

人間というのは、どうしても自分は特別なのだという感情を持つたがる。と、同時に、目立ちたくないという矛盾した感情も持つのだが。ともかく、「普通」だとか「大した事ない」とか言われて、喜ぶ奴はそうそういないはずだ。

「そう悪く思うな。どこにでもいる、っていいのは良い事なんだよ。どこにでもいる、とか、普通って言う事は、少なからず平均点は満たしているという事だ。そういった人材を欲しがり、突出した人材を嫌う企業というものは、特に日本企業には多い。型にはまらない強すぎる個性を嫌うのは、よくある話だ」

「はあ……」

何と無く頷いておく。フォローされたのだろう。

「ともかく、これで自己分析は完了した」

「これでいいんですか？」

「勘違いしないで欲しいのだが、自己分析というのは、所詮はツールだと言う事だ。就職活動でよくある失敗というのが、自己分析をやりすぎると言う事だ。『自分はこういう人間なのか』『自分は何がしたいのか』など、内向きに考え続けてもらちが明かない。そういうものは、常に外向きに考えるものだ。多くの人と付き合い、行動していく中で、自己分析というものはさらに進められていくのだ」

「はあ……」

俺は頷くしかなかった。

「次に君がしなければならぬのは、志望動機だ。面接時には必ず聞かれる。君はなぜ、そのコンビニを志望したのだね？」

「それは」

正直の話してもいいものか。好きな人が働いているから、などという邪と取られかねない理由でいいものか、どうか。

「まあ、これは取り繕っても意味がない。君の率直な情熱をぶつければいい。私が考える事でもない。ともかく、一度模擬面接をしてみよう」

しゅーしょくぶ！ ? (前書き)

一応毎日更新。

視点変更って、よくないっばいって作法ではよく言われますけど、あれはシーン内での話っばいですね。あんまり視点コロコロ切り替わる作品って、読み辛いですけどね。

しゅーしょくぶ！ ？

「ふむ。前々から思っていたのだが、君はプレッシャーというものとことん弱いな」

「ええ……まあ……」

模擬面接を終えての中川さんの評価だった。

俺の面接はズタボロだった。面接となると、普段以上に緊張してしまう。呂律も回っていない。

「君のあがり症というものは、面接慣れしていないとか、そういうレベルの問題ではなさそうだな。もっと根源的な問題、君のトラウマに関わるような問題だ」

トラウマ。

「よかつたら、話してくれないか？ 私で力になれる事なら、力になる」

俺は、過去のトラウマの話をし始めた。

そう。あれは今から八年程前。

家族で海水浴に行った時だった。その時、妹の佑香と俺が乗っているボートが流された。俺は何とか、岸まで戻ろうとした。一瞬だけど、その時、死の恐怖というものを味わった。海が怖い。水が怖いという事を知った。

結局、その時は、ライフセイバーに助けられたのだが。

そして、水に対しての恐怖感を拭えないまま、学校の授業での水泳が始まった。

俺はその時から、泳げなくなっていた。タイム測定の時、俺は何とか飛び込んだ。しかし、溺れてしまった。冷静になれば、足がつかず事も忘れて。

その時、好奇の目線で見える奴がいた。嘲笑する奴がいた。

何より、好きな子の前でそんな醜態を晒した自分が情けなかった。結局、あの時のトラウマが原因で、このあがり症が出来たのだと

思う。結局あれから、俺のカナヅチは治っていない。

「なるほど……だったら、話は簡単だ」

中川さんは掌を拳でポンと叩き、

「今度の日曜日。10時に駅で集合しよう」

日曜日。俺は鼻歌を歌いつつ、着替える。

「……何鼻歌歌って着替えてるの。気持ち悪いなあ」

妹の佑香は、そんな俺を見てそう言った。

元はと言えば、こいつがボートに乗って向こう岸まで行こうとか言っていたのが、俺のトラウマの発端だったのだが。

なんとというか、今にしては感謝すべき事なのかもしれない。

よくよく考えなくても、中川さんは美人（何と無く美少女と言うのは憚られた）だ。そんな中川さんと、トラウマ解決の為とはいえ、デート（と言ってもいいだろう）できるのは、僥倖と言えた。もっとも、それは英梨に対する裏切りになるのかもしれないが、別にまだ付き合ったりしているわけではない。

「ありがとうな。佑香」

とりあえず、感謝の気持ちを口にする。

「うげー。気持ち悪い。なんだか、その余裕のある笑みが気持ち悪い」

そんな妹の『気持ち悪い』にも、余裕を持って対応ができる今の俺だった。

「ほら、早く部屋に戻ってネットゲでもしてろよ。せつかくの日曜日なんだし。お兄ちゃんはこんなに良い天気だから、外に行くけどなえっと、水着はちゃんと持ったっけな」

「なんかむかつく。いつもは、『ネットゲばかりしやがって』って感じで、呆れて馬鹿にしたような目であたしを見てくるくせに。その余裕のある対応　まさか、あのお兄ちゃんに」

「それじゃ、留守番よろしくな。うちで大人しくネットゲやってるんだぞ」

俺は、そう言っただけで家を出た。

俺は結局、中川さんと約束していた駅に、時間ギリギリについた。中川さんは白いスーツのような恰好に、日よけの為か、これまた白い帽子を被っていた。

あれだけの美人なのだから、周囲の視線を集め、良い意味で目立っていた。

「遅いぞ、深谷君」

「え？ けど時間には間に合いましたよ」

俺は腕時計を見る。走ってきたので、少し息を切らしていた。

「何を言う。OB訪問だったり、リクルーターと会う時だったら、15分前にはその場にいるのは常識だ。ギリギリだったら余裕がないだろう」

「はあ……」

やはり中川さんはなかなか手厳しい。

「それでは、そろそろ行こうか」

「あつ、はい」

俺は中川さんに連れられ、駅の中に入っていく。

あやしい。と、深谷佑介の妹である、あたし。兄を尾行してきた佑香は思った。ここで視点変更、きゃー。ともかく、兄の異変を感じ取って、後ろをつけてきたあたしだったのだ。兄の奇行。怪しい、こいつは怪しすぎるぜ。妹の勘がビンビンするぜ。もうビンビンだ。

というわけで尾行開始したのだった。

駅まで来てみると、お兄ちゃんは謎の美人さんと待ち合わせをしていたのだ。年は大学生か、社会人なのかな。何だか、出来る女の人って感じ。

お兄ちゃんには全然似合っていない。別に、これは嫉妬とかそういうのじゃないんだからね。単に、お兄ちゃんにはあまりに不釣り合

いだなつて思っただけで。あー、もううるさいな。ツンデレ妹なんて今時流行らないよ。

あつ、駅の中に入っていく。

ともかく、あたしもそれについて、駅の中に入って行こうとした。

「あれ？ 佑香ちゃんじゃない。おはよー」

と。そんな時に現れたのは、先輩の河合英梨さんだった。

「あれ？ 先輩、今日はバイトじゃないんですか？」

「今日は夜勤なんだ。だから、昼間は暇」

先輩は勤労少女である。ネトゲ廃人のあたしとしては心苦しい。

ネトゲでレベル上げしても、あんまりお金にはならないからね。ならなくもないけど、バイトの方が割りはいいよ。

あ！ もうすぐ見えなくなっちゃう。

「先輩！ ちょっとこっちに来てください！」

「え？」

「いいから」

あたしは河合先輩の手を引きずる。こうして、強引な尾行は続くのであった。乞うご期待。

しゅーしょくぶ！ ? (前書き)

昨日は書けなかったです。眠かったです。結構、毎日小説書くのは大変そうですけど、ある程度慣れているので、そこまで大変でもないです。

これからも、一応、大体、毎日小説書いていければなと思います。

しゅーしょくぶ！ ？

電車で二十分くらい行ったところに、目的の施設はあった。

大型のアミューズメントパーク。

中には水着のまま入れる風呂だったり、ウォーターライダーがあつたり、競泳用のプールがあるらしい。

俺は今まで来た事はなかったが、結構有名な、複合的アミューズメントパーク、らしい。デートスポットとして人気が高い事は知っていた。

俺は中川さんに連れられるまま、施設の中に入る。まず、入場券を買う。

そして、水着を持ってくるように言われていたので、更衣室で着替える。中川さんとは、更衣室の出口あたりで待ち合わせる事にした。

男の着替えというものは、簡単なものなので、当然のように先に出る事になる。

そして、しばらく出口付近で待っていた。

「またせたな。深谷君」

出てきたのは、真っ白なビキニを身につけた中川さんだった。その姿を見た瞬間、唾を飲んだ。スーツや制服の上からでは、にわかには想像できなかったのだが、水着となるとそうじゃない。

はつきりと、そのプロポーションの良さを見せつける形となる。

そんじょそこらのグラビアアイドルや女優では敵わないほど、形が整っている。

そのあまりの魅力に周囲からの視線も集まってくる。

「どうした？ 何をそんなに驚いている」

そういった物事に無頓着なのか、あるいは慣れきっているのか、中川さんは不思議そうに聞いてきた。

「いえ……何でもないです」

思わず赤面してしまう。元々、視線やプレッシャーに強いタイプではないのだ。

「それでは、さっそく練習をしよう」

俺と中川さんは、50mプールに行く。

「ん？」

「どうしました？」

中川さんは急に立ち止った。

「何だか、誰かに見られている気がするな」

そりゃ、さっきから注目を集めてるからでしょう。

俺はそう思っていた。

やばかった。

急に振り返ってきた。

面影に身を潜めていた、あたしに勘付いたようだった。かなり勘の鋭い人みたいだ。

「佑香ちゃん、こんな事して大丈夫なの？」

水着に着替えている河合先輩は心配そうに聞いてくる。あたしと

河合さんは、水着を買って、追跡を続行したのである。

「大丈夫です。それよりあたしは、心配なんです。お兄ちゃんがあんな美人とプールでデートだなんて、きっと何か裏があるに違いありません」

「裏って？」

「きつと、このまま結婚、とかいう話の流れになって、あの美人さんが『ねえ、お願い、私の事業が傾きそうで、それを立て直すには一千万円程必要なの』とか言い始めて、結局は結婚式の前に夜逃げするんです」

「結婚詐欺……」

「というわけで、兄は騙されているに違いないんです」

「そんな事ないとおもっただけど……」

呑気にそう言う先輩だった。

「ただ、あたしはしつかりしたネトゲ廃人（矛盾）の妹として、騙されている兄を見過ごしてはいただけなかったのだ。」

「ともかく。」

「こうして中川先生の水泳講座が始まった。」

「まず、水には入れるな？」

「はい……」

「とりあえず、俺は水に入る。流石にこれ位は出来た。」

「後は、顔を水につけられるかという話になってくる。これもクリア。」

「後は、私の手に掴まれ」

「手に捕まって、犬かきをするような恰好になる。」

「このまま、泳ぐ補助をしてくれるみたいだった。」

「その手に引きつられ、しばらくバタ足をする。」

「よし。良い感じだぞ。深谷君」

「中川先生もそう言っていた。」

「調子に乗って、バタ足を続ける。水に対する恐怖心、トラウマは若干薄れそうになった。」

「しかし。」

「ピキイ。」

「と音がしたような気がした。と、同時に、足に痛烈な痛みが走る。」

「どうした？ 深谷君」

「足が！ 足が！」

「普段、運動していなかった事が祟った。足を攣ってしまったのだ。多分、水泳になれていなかったという事もあるのだろう。」

「溺れた俺は、水面でもがき続ける。こんな事じゃ、水泳の授業の時と同じだった。」

「落ちて着け深谷君！」

「俺は、中川さんに抱き抱えられる。まるで、赤ん坊のように。」

「私が支えている。だから、安心しろ。君が溺れる事はない」

攣った痛みというのは、最初はものすごく痛いけど、それでも一瞬で引いていく。最終的には、殆ど痛くなくなってきた。それは良かった。

ただ 気づいたら、中川さんの顔が赤面する程近くにあった。綺麗な顔。怖いほど整った顔、そして、露のある唇が映る。

傍目から見れば、このままキスでもされてしまうのではないかと思ってしまう。そんな恰好だった。

しばし、両者無言だった。間があった。

「……その、大丈夫です」

「そうか……それはよかった」

なぜか、その恰好からは動けなかった。
と。

「お兄ちゃん！ だめええええ！」

急に叫び声が聞こえてきた。聞きなれた声だった。

「お兄ちゃんは騙されてるんだよ！ お兄ちゃんがそんな美人さんと付き合えるわけがない！ だって、明らかにお兄ちゃんはモテなさそうだし、暗そうだし、情けないし、頼りないし！ だから、そんな事、天地がひっくり返ってもあり得ない事。きつと、その美人さんは、有名な結婚詐欺師で、お兄ちゃんは、体中のありとあらゆる毛がむしり取られるまで筆り取られて、それで、結婚式の直前に高飛びされるんだよ。そんな事する位なら、裕香のアイテムに課金した方が百倍マシだよ！ だからお兄ちゃん、そんな美人に貢ぐ位なら、裕香のネットライフを応援してよ！」

裕香は顔を赤くして、大声で叫ぶ。

周囲が静まった。

「佑香……どうしてお前がここに」

「兄が騙されそうになっているところを、妹が見過ごすわけにはいかないよ」

「……あの、裕香ちゃん。あんまり叫ぶと周りの人に迷惑だよ」

佑香に続いて出てきたのは、英梨だった。二人とも、水着に着替

えている。

「どづいづ事なんだよ……」これは

しゅーしょくぶ！ ? (前書き)

とりあえずアップ。千字行ってないけど。

毎日続ける事が必要な気はするので一応更新しときます。

しゅーしょくぶ！？

プールサイドのテーブルで、とりあえずは休む事にした。

施設内の食べ物やで食べ物と飲み物を注文。当然のように、こういう施設内の食べ物屋なので、値段は割高だった。ペットボトルだって、普通は150円のが200円する。

貧乏学生には手痛い出費だった。

「いやー、だから、裕香は、お兄ちゃんが騙されてるんじゃないかって心配したわけなのです」

と、妹の佑香は釈明した。

「だって、お兄ちゃんがこんな美人さんと付き合えるわけがないじゃないですかー」

「まあ、もつともだな」

中川さんはそう言って頷く。

もつともなんだ。シヨックだ。わかってたけど。

「私はこのうものだ」

中川さんは持っていた手荷物の中から、名刺入れを取り出す。抜かりのない人だった。

『修職部？』

佑香と英梨の、二人は口を揃えた。

「知らないのも無理はない。私が今年創設した部だ。修職といても、就職とは違う。一般的な就職は、会社に入る事を示す。しかし、我が修職部は、その字の通り、会社に入った後の事も考えて仕事選び、何より、この厳しい就職戦線を勝ち抜き、成長していく事を目的としている」

「はあ……」

二人は呆けたような声をあげた。

「じゃあ、お兄ちゃんとここに来たのも、そのしゅーしょくぶの、活動の為なんですか？」

佑香は尋ねる。

「ご明察、というところだ」

中川さんは答えた。

「私は彼のトラウマを払拭しに来たに過ぎない」

中川さんは言い切る。

きっぱり言われると、袖に振られたようであまりに悲しい俺だった。

「トラウマ？ お兄ちゃんにそんなものあったっけ？」

「彼は泳げないというコンプレックスを抱えていた。それが通じて、あがり症という症状に？がっていると考えられる。今度の面接の為にそのあがり症を改善しに来たというわけだ」

「あー。なるほど。という事は、わかりました。そういう事ならあたし達も手伝います。ね、河合先輩」

「あつ、ええつと……うん。そうだね」

何だか浮かない顔をしていた英梨だった。

俺達は軽く昼食を終え、再び、プールに入る事になる。

しゅーしょくぶ！ ? (前書き)

毎日更新だけが目標。ちよっとずつ進んでる。ちよっとずつ。

しゅーしょくぶ！ ？

その後は、プールでの水泳の特訓が続いた。結局、特訓はみっちり続き、帰る頃には夕暮れ時になる。電車に乗って、家まで歩いて帰る頃には、夜になっていた。

とりあえず、中川さんとは駅でわかれた。帰り道が途中まで一緒なので、英梨と途中まで帰る事になる。

ちなみに、妹の佑香はプールで遊び疲れたからか、俺の背中でご就寝中だ。そもそも、徹夜のネトゲであまり寝てなかったらしい。

それなのによく、尾行するなんて元気があったものだど、感心する。

「ねえ、深谷君」

「……どうした？」

「どうして、その、中川さんの……修職部に入ってみようと思ったの？ やっぱり将来の事とか、就職活動の事とか不安なの？」

思わず、ドキッとしてしまうような、核心をつくような質問だった。そりゃそうだよな。それは疑問にもなる。好きな人と同じ職場で働きたいから、とか、邪な感情で入ったとは言い辛い。けど、今は誰もいなかった。佑香は寝ているし。

「それもあるけど……実は俺、お前の働いているコンビニの面接を受けようと思ってたんだ」

「前言ってたね。どうして、うちのコンビニなの？」

「それは」

ここで言うべきなのか。言ってしまったら、そもそも、コンビニの面接を受ける必要もなくなってしまっただろう。片想いというのは、想いを打ち明けたら終わってしまうものだ。

だったら、このままずっと片想いのままの方がいいのではないか。そいう、チキンな感情も芽生える。

「それは」

俺は意を決して、伝えようとする。

「ん。あれ？ あたし寝てた？」

流石におぶさった格好のままでは熟睡はできなかったのだろう。
佑香が目を覚ます。

「……ああ。寝てた」

俺はそう言う。ある意味、ほっとしていた自分に嫌気がさす。

「私、ここまでなんだ。これからバイトだから。それじゃあね、二人とも。今日は楽しかったよ」

そう言っつて、英梨は別れていく。

「ああ。じゃあな」

「じゃあねー。先輩。バイト頑張っつてね」

こうして、今日一日が終了した。

しゅーしょくぶ！ ? (前書き)

毎日更新できなかった。

一応書いたので更新。継続は力。

それしか書いてないです。内容については、面白いとか、面白くない以上に、オリジナル小説って、やっぱり読まれない気はします。二次創作だったら、例えば、僕が書いてた死後の世界の野球戦線だったら『エンジェルビーツ』『リトルバスターズ』とかで検索すれば出てくるんでしょうし、そういった用語で検索する人も相当いるんでしょう。

そして、二次創作って入りやすいしねー。

『エンジェルビーツの二次創作が読みたい！』って気持ちで読む人もいるんでしょうし。

けどやっぱり、二次創作で満足してたら、いつまでも自分独自のコンテンツは作れないんで、一次創作で練習していく事にします。

……というわけで、長いまえがき。

しゅーしょくぶ！ ？

「ふむ。それで君のあがり症は治ったのかね？」

プールから帰って、翌日。俺は修職部の中川先生のところを訪れていた。

「……はい。おかげ様で完全ではないですが」

「完全でないのは当然だ。緊張は誰でもする。特に面接の場ではなむしろ緊張しない方が問題なのだよ」

「……けど、もっと対策して、完璧にしてからのほうが……」

「深谷君。生憎、完璧などというものは存在しない。面接とは、完璧な状態で行くものではないのだよ。例えるなら、恋愛もそうだ。君は完璧になるまで、想い人に告白をしないつもりなのか？」

中川先生の言葉は、俺にとってグサつときた。いわば、これは逃げなのだ。準備が足りてないだとか、心の準備が、とかは、単に自分に自信がなくて、逃げ回ろうとしているだけなのだ。それはただの先延ばしだ。そんな事をしていては、機会を失うのは目に見えている。

「わかりました。今度の機会に、面接の申し込みをします」

俺は中川先生にそう言った。意を決した。

「それがいい。ふっ、しかし、君もなかなかいい顔をするようになったじゃないか」

中川先生は笑った。

トウルルルル。

緊張する。ただの電話音なのに。

俺は早速電話をかけた。英梨の勤務先のファミリ マートにだ。トウルルル。

何度かコール御が続く。この時間は、異様な程長い時間に思えた。

「……はい。こちらファミリ マート。 ×店です」

聞こえてきたのは若い女の人の声だった。英梨ではない。確か、店長の人だ。

「あの……アルバイトの面接を受けたいんですけど」

「アルバイトの面接ですか？ わかりました。とりあえずは、今のところ空いている面接の日程なんですが」

日程をいくつか提示される。

「この日のこの時間帯なら行けます」

「はい。わかりました。では、店舗の方に履歴書をご持参ください。お待ちしております」

「……失礼します」

プツリと電話が切れる。ツー、ツーという音が断続的に聞こえてきた。

こうして、面接の日程は決まった。

面接の日程が決まってからというもの、俺の頭の中はその事だけでいっぱいだった。面接ではどんな事を聞かれるのだろうか。そして、どう答えればいいのかだろう。授業中もその事で頭がいっぱいだった。そして、ついには面接の日がやってくる。

俺の目の前に聳えたつのは、いつも通っているファミリ マートだった。

24時間営業のコンビニ。現代においては、特に珍しくも何ともないその建物が、今の俺に多大なプレッシャーを与えている。

とりあえず、店舗に入る。今日のシフトは英梨ではないようだ。

別の人が、ファミマの制服を着ている。高校生くらいの、男の子だった。俺と同じか、一個下だろう。

「あの！……面接の予約をした深谷というものですが」

思わず声が裏返ってしまう。まだ緊張しているようだ。

「はい……わかりました。少々お待ちください」

一度、奥へ店員は入って行った。しばらくして戻ってくる。

「お待たせしました。中に入ってください」

中には、製品、陳列された製品、防犯用のカメラ、そのモニターなどが目についた。

そして、簡素な机がひとつ。机についていたのは、まだ若い女の人だった。20代後半位に見える。長いストレートの黒髪。どことなく、古風で、家庭的な印象を受ける。整った顔立ちは、間違いなく美人に映る。

何度か話には聞いていた。実際、顔を合わせた事は何度もある。

このファミリ マートの店長の長谷川春子さんだ。

いつも、優しい笑顔で俺を出迎えてくれる。接客業の鏡みたいな人だ。

「あら、君は」

長谷川さんは俺の事を見て、

「よく来てくれる子ね」

そう言ってきた。

「はい。いつもお世話になってます」

「いえいえ。こちらこそ。とりあえず、今日はうちのアルバイトの面接を受けるって事でいいのよね？」

「はい」

「じゃあ、履歴書持ってきてる？」

「あつ、はい。これです」

俺は履歴書を提出する。お世辞にも字が綺麗とは言いが、これでも一生懸命書いた履歴書だった。

「はい。ありがとう。それじゃあ、面接するけど問題ない？」

「はい。問題ないです」

俺は頷いた。

「うーんとね。じゃあ」

長谷川さんは、頭を悩ませつつ、

「そうね。これにしようかしら」

ごくぐり。

俺はつばを飲んだ。内心は、かなり上がっていた。心臓の音はバ

クバクしているし、呼吸も荒い。人前で話すのも、あまり慣れていない事ではなかった。何より、面接という場合は、アルバイトといえども緊張してしまう。

「じゃあ、あなたをガンムのモバイルスーツで例えるならなんでしょう？ 一分以内に答えてね」

笑顔でとんでもない事を言ってきた。

「は？」

「だから、モバイルスーツよ。モバイルスーツ。ガンム知らないの？ そういえば、店長はかなりのガンダム好き、だと、英梨から聞いていた。意味のわからない話が多くて困るらしい。」

俺はガンプラを多少作った事があり、アニメも多少見たので、ガンムを知らないわけではなかった。

しかし、予想だにできなかった質問に、俺は動揺してしまった。

ガンダムってなんだよ。ガンダムって。

俺は中川先生の講義で教わった事を思い出す。

「今まで模擬面接を重ねてきたが、これらはいくまで形式的なものに過ぎない。いいか、深谷君、本番の面接というのは、いわば実践だ。模擬面接は、あくまでも練習に過ぎない。」

予想さえしてなかったような質問が聞かれる事もある。だがいいか、決して予想していない質問に恐れる事はない。要は面接官は、予想もしていなかった質問に対して、どうやって動くのかを見ているのだよ

「……そういう事だ。長谷川さんは、一分と言った。こうやっている間にも時間は過ぎていく。必死に考え、俺は答えを出す。」

「その！ ジオングです！」

「ジオング？ その心は？」

「その……僕はあがり症なところがあり、地に足がついていないところがあり、また、未完成な状態だからです。まだ、パーフェクトジオングになる余地を残しています」

「なるほど……」

長谷川店長は、その事をメモする。面接用のシートみたいなものがあるようだ。

「じゃあ 次の質問ね」

長谷川さんの奇天烈な質問は続く。

ガンダムシリーズの何が好きかー、とか、ガンダムSEEDで、好きなカップリングはどれかー、とか。

全く面接に必要なとは思えないような質問ばかりをしてきた。俺は何とか、そういった質問を無難な回答で返す。

「……じゃあ、以上で大体の面接を終了します。それで、次が最後の質問」

「……はい」

「どうしてうちのコンビニを志望したの？ その志望理由を教えてください。履歴書見たところ、君の家は、ここから結構離れたところにあるよね。もっと近い所にコンビニはいくらでもあるはずなのに」

「……それは」

素直に答えてもいいのか、どうなのか。

『いいか。面接では嘘についてはダメだ。あくまでも本心で語るべきだ。面接官なんてものは、嘘に敏感なんだ。今まで沢山の学生を見てきたのだから、当然人を見る目にもたけている』

中川先生の言葉を、俺は思い出す。

「……それは、好きな人がいるからです」

「好きな人？」

「はい。その人と一緒にいたいっていう気持ちもあります。だけど、今の僕は成長して、その人に近づいていきたい、そう思うようになったんです。自分の欠点を直して、その人と、向き合えるような自分になりたいと思った、それが、このコンビニを受けた理由です」
俺はそう言った。

「はい。では、面接はこれで全て終了です。普通だったら、これか

「何日かは時間を頂く予定なんだけど。今回はあなただけに特別に、今結果をお伝えします」

「今？ ……それを聞いて、一度落ち着きかけた心臓の鼓動が早まる。」

「深谷佑介君、君を当店でアルバイトとして採用します」

長谷川店長は破顔した。

「歓喜よりも先にやってきたのは、茫然とした感情だった。」

「……え？ 本当にいいんですか？」

自分が採用されるとは思わなかった。自分に自信を持ってない、俺が。多分、この自信のなさもあがり症の原因になっていたのだろう。だから、その言葉を聞いても、いまいち実感というものが湧いてこなかった。

「ええ。当然よ。もっと自分に自信を持って」

「ありがとうございます！」

俺は椅子から立って、頭をさげた。

「そんなに畏まらないでもいいの。ところで」

「はい？」

「あなたが好きなのって、英梨ちゃんでしょ」

「な、どうしてそれを。」

「だって、いつも、あなた英梨ちゃんがシフトの時にここに来るんだもの。それに、態度でバレバレ」

長谷川店長は笑った。

「けど、注意点がひとつだけ。勤務中は真面目に働く事。仕事に恋愛感情持ちこんじゃダメよ」

「人差し指を立てて、そう忠告する。」

「は、はい！ 肝に銘じておきます！」

「シフトについての相談は、今度来た時にしましょう。ちゃんと学校の予定とか、見ておく事。とりあえず、これ、契約書。とりあえずは、研修から始めるから」

俺は契約書を受け取る。細かい字で色々書いてある。家に帰って

ちゃんと読もう。

「言っとくけど、私は厳しいから覚悟しておく事」

「はっ、はい」

「けどまあ、やってれば楽しい事もあるわよ。好きな人と働けるなら、それだけでも楽しいだろうしね。ふふふ」

長谷川さんは笑った。

ともかく、俺にとっての第一関門ともいえる関門を、通過した。

勿論、これはただの始まりに過ぎない。

しゅーしょくぶ！ ? (前書き)

毎日小説を書く。
いう事特になし。

しゅーしょくぶ！ ？

第二章。

「中川先生！」

俺は勢いよく修職部の部室をあけた。

「あっ」

「……………」

目があった。目に飛び込んできたのは、成熟した大人な印象を受ける紫色の下着。服の上からでも想像がついたが、実際、かなりのナイスバディだった。そもそも、水着姿を見た時からわかっていたのだが。下着と水着では、エロティズムの上で相当な違いがあった。しばらく間があく。沈黙がする。

中川先生の目が、驚きの色から、軽蔑の色に変わっていく。音にすると、じとーっとでもするような目つきだ。

「すみません！ 中川先生！」

俺は猛烈な勢いで謝る。

「その、着替え中だとは知らなかったもので」

「……………いいから、早く出て行ってくれないか深谷君」
叫ぶ事もなく、淡々と諭す。ただ、顔は引きつっていた。怒っているのだろう。

「入っていいぞ。深谷君」

「はい……………」

「全く、入る前にノックをする事くらい常識だろうに」

中川先生は溜息を吐く。

「すみません」

「まあ、そう謝る必要もない。鍵をかけなかった私も私だ」
諦めるように、再度溜息をつく、中川先生。

しかし、こんな美人の下着姿を見れたのは、ある意味ラッキーなのかもしれない。

「……なんだその顔は。全く、大方、私の下着姿を見れた事に、対して、幸運だとも感じているのだろう。思春期の男子が抱くような、下衆な考えだ。くれぐれも、これで慰めようだとか、馬鹿な考えは起こすな、深谷君」

心を読まれているかのようにだった。この人の読心力を舐めてはいけなかった。

「まさか……そんな事はしませんよ。それより、どうしてスーツに着替えたんですか？」

中川先生は、制服からスーツに着替えている様子だった。

「これから、人材コンサルティングの仕事があるんだよ」

「人材コンサルティング？」

「まあ、失業中の労働者に講義をしたり、就職の指導をしたり、色々だ。本来なら君への指導もお金を取るところだ。しかし、高校生という身分と、部活という事もあってお金は取っていないのだよ。全く、感謝して欲しいものだ。おまけに着替えまで覗かれては割に合わない」

「すみません。ですが、あれは事故です」

「嬉しい事故だったが。」

「どうだか。事故だという証拠はどこにもない。物陰から覗いていた君が、機会を見計らって入ってきたという方がむしろ自然ではないか？」

俺はそんな事はしない。断じて。

「まあ。君がそんな事が出来る程器用な人間だとは思ってないから別にいい」

「それで、中川先生」

「わかっている。採用されたのだろう」

中川先生は微笑んだ。

何でも分かるようだ。というか、これだけ喜んでいれば、それも

当然か。

「ともかくおめでとう。だが、採用されるという事は、ただのスタートに過ぎない。修職というものは、今後ずっと続いていく問題だからな。極端な話、君はそのアルバイトの仕事をずっと続けていくつもりなのかね？」

僕が提示された時給は、研修中は770円。最低賃金に近い金額だった。昇給などは考えられるとはいえ、今後も大して変わらないだろう。

「いえ……そんな事考えられません」

「そう。普通は考えられない。しかし、今のご時世、アルバイトをずっと続けていく人がいるんだよ。所謂フリーター問題だ」

「……フリーター」

話にはよく聞く。フリーター。友達の兄弟にもそういう人はいるし、コンビニで働いている人の中にも、そういう人が相当数いる。

「フリーターとは、フリーアルバイトの略称だ。1990年代から、定義づけがされた。所謂、学生でもないのに、アルバイトで食いつないでいる連中の事だ。今では、フリーターの数は、年々増加中で、今では、役三百万人程だ。ちなみに、ニートと同じように15〜34歳の若者に限定されている」

「300万人？」

「いまいち、その数字が多いのか少ないのかわからなかった。

「ちなみに、今の生産年齢人口は6740万人だ」

「だったら、その数字は少ないんじゃないですか？」

「日本が少子化なのは知っているだろう。近年の出生率は1.3%程度をうろろしている。先進国の中でも、少ない方だよ。私達はそういう世代だ。15〜34歳までの生産年齢人口は、役1500万人。今では、五人に一人がフリーターにならざるを得ない時代なんだよ」

「けど、進んでフリーターになる人もいるんじゃないですか？」

「フリーターにはよく三つのタイプがあるとされる。ひとつは夢

追い型だ。これは、例えばよくあるのは、ミュージシャンになりたい、だとか、小説家になりたい、という考えでフリーターになったタイプ。次に、やもうえず型だ。最近の就職氷河期の中で、正社員を目指して就職活動をしていたのだが、結局なれず、フリーターとして甘んじているタイプ。最後がモラトリアム型だ。良い年しても、何と無く、学生時代の延長みたいな感じで、フリーター生活を享受している連中。この三つのタイプにわかれている」

「……はあ」

「フリーターという生き方も、まあ、否定しはしないが。良く言われるのは、正社員の生涯賃金は3億円程であり、フリーターは600万円程度だとよく言われる。悲しい事だが、フリーターは勝ち組、負け組の負け組として象徴される仕事だ」

「その、フリーターになった人は将来どうなるんですか？」

「君は、アルバイトの募集欄を見ただろう？」

「はい」

「年齢制限がなかったか？」

「あつた。確か、35歳くらいまでだ。」

「フリーターは35歳位になると、働ける仕事も限られてくる。いざ正社員となっても、良い年してろくな職歴もない人間に、企業は門を開かないし。ついには、仕事につけなくなる場合だってある」

「恐ろしい事だった。首筋に汗が流れ落ちる。」

「それで、君は、35歳になっても、今のアルバイトを続けていたとして満足なのか？」

「ぶんぶんぶん。」

「俺は首を横に振った。」

「まあ、普通はそうだろうな。そういうわけなら、君の修職というのは、終わっていない事になる。修職部の目的は、その35歳になる時、自分が納得できるような人生を送っている事だ。そして、その字の通り、職を修めている事でもある。色恋沙汰も結構だが、君はそういう事を考えていかなければならない立場にある」

「……つまり、これからもご指導お願い出来るんですか。中川先生」
「君が職を修めていないと感じていく限り、修職は続いていくさ」
「ありがとうございます」
「ともかく、今回はおめでとう。また、何かあったら私に相談に来るといい」
「はい！」
「ただし、入る時はノックをする事」
「……はい」
再三その事に対して注意された。

しゅーしょくぶ！ ? (前書き)

駄文を書き続けられる程度の能力。
けどそれが、一番必要な資質な気がする。物書きに。

しゅーしょくぶ！？

ともかく、ファミリーマートでのアルバイトが始まった。最初は研修としてのスタートだ。レジ打ち、品出しなどの基本的な事、掃除などを習って行く。こっそりと、シフトを英梨と合わせたりもしていた。

初めて見ると意外にアルバイトというものは大変だという事に気付いた。レジ打ちひとつ取って見ても、傍から見ているのとは違う。立ちっぱなしもそれなりに体には堪えた。

やはり働くと言う事はそれなりに大変な事なのだと、思い知った。ともかく、社会に出るという事は、大変な事だ。数年後、早ければ来年にでもそういう事になる。日本は高校まではほぼ100%行く事になっているが、別に高校進学は義務でもない、ましてや、大学はそうだ。働くという事は、何も遠い未来の事ではない。今、ここにある現実なのだ。その事をアルバイトとはいえ、思い知った。

……ともかく、これも良い経験だ。

「……就職活動かあ」

レジに立っている英梨は呟く。

「どうしたんだ？ 河合」

流石にまだ下の名前で呼ぶのは憚られた。

「先輩から聞いたんだ。先輩は就職活動してるって。就職活動って言うても、高卒で入る就職活動じゃなくて、大卒で入る為の就職活動。今じゃ、あたし達みたいな受験を必要としないで進学する、なんていうの。そう、内部生は、受験勉強の代わりに就職活動をするのが当然になってるみたい」

確かに、上級生でスーツを着て慌ただしくしている人は多い。別に中川先生のような人はそんなに珍しくなかった。あの人自体は就職活動がどうなっているかなどはわからないが。

「そうは言っても、就職活動って何をしたらいいかわかんないし……」

…。それに、リクルートスーツを買うお金って、そんなに安くないから」

英梨は溜息を吐く。

将来の事を憂いているのは、何も俺だけではなかった。誰もが悩んでいる。国政は決してよくなく、ニユースからは毎日のように悪い話ばかりを聞く。大卒内定率の大幅な低下、そして、中川先生が言っていたように、フリーターになる人、ニートになる人、そういった人達が大勢いる。

皆、将来の事を考え、不安になっているのだ。

そんな時、ピンとくる人が一人いた。俺では、多分、英梨の不安を解消しきれない。

「河合……俺、ちょっとお前を紹介したい人がいるんだ」

「え？」

「明日の放課後、俺に付き合ってくれないか？」

「別にいいけど……」

そう言っているうちに、レジに客がきた。先輩である英梨が対応する。注文されたのは肉まんだったが、英梨はあんまんと間違えていた。結局俺が肉まんを包み、出す事になる。

「……で、私のところに来たというわけだな」

何だか、意味深な目つきでこちらを見てくる中川先生。

「ご迷惑でしたか？」

「いや……別に頼られて悪い気はしないが。君の場合は、私を頼り過ぎというものだろう」

「……す、すみません」

「それで……彼女は？　そういえば、この前プールで会ったな」

中川先生は、英梨を見る。

「は、はい！　河合英梨と申します！　よ、よろしくお願いします」
妙に裏返った声で、英梨はそう言った。

「それで、今日はどういった要件でここに来たんだ？」

「その、就職活動について何をどうしたらいいか全くわからなくて、それで、深谷君の話聞いたんです」

「……そうか。今のご時世、別に高校生でも就職活動を意識しても不思議ではないが」

あんたも高校生だろ　という突っ込みはしなかった。中川先生は何と無く、高校生という感じはしない。同じ高校生のはずなのに。「それで、我が修職部を訪れたというわけだな？」

「は、はい！　修職部の事は深谷君から聞いています！」
何だか妙に緊張した様子の英梨だった。

「そうか。では、自己分析などは終えていると見ていいか」

「は、はい！　一応。それで、就職活動と言っても、まず何をしてみたらいいのかわからなくて、まだ、社会に出て働くという事がどんな感じがよくわからないです。勿論、アルバイトとしての経験はありますけど、それと、実際に正規の社員として働くという事は全く違ってくると思いますし」

「そうだな。アルバイトと正社員では求められるものも、責任も大きく違う。ともかく、君の場合は、社員として働くという事を肌で実感したいという事でいいんだな？」

「はっ、はい！」

「ところで……君達は、夏休みの予定というのはどうなっている？」

「え？　これと言っては。バイト位」

「同じく」

同じく、バイト以外は特には。唯一と言っていい友人のロッキーはボクシングの練習で忙しいらしく、遊びに行くような友達もいない。かといって、現在も絶賛彼女いない歴は進行中である。寂しい日々が続いている。悲しい事だが。

「それだったら、インターンシップにでも行ってみたらどうだ？」

『インターンシップ？』

俺達は口を揃える。

「インターンシップとは、学生が一定期間研修として企業で働いた

りする、いわば職場体験だ。学生はインターンを通じて、仕事とはどういうものを学ぶ事ができる。就職不況という事もあり、インターンに参加する学生は増加傾向にある。今では、高校生のうちからインターンシップに参加する事も珍しくはない。具体的な就職活動のスタートというのは、インターンシップから始まる場合も多いのだよ」

「……けど、私達を受け入れてくれるような会社があるんですか？」
「表むきは、高校生のうちから、インターンシップを受けさせるような事を禁じている風潮もあるが、実際にはやっている企業も多い。私の知っている企業に、インターンシップという事をお願いしてみよう」

「ほんとうですか？」

目を輝かせる英梨。

「ああ……もうすぐ夏休みだ。その期間を利用して、インターンシップに参加しよう」

けど、インターンシップって。聞いた限りは、仕事をするよくなものだろう。しかも、お金は貰えない。インターンシップの事は話には聞いていたが、最近では、学生に対して、無給な事を良い事に、過酷なノルマを課したり、アルバイトと似たような事をさせている企業もあるようだ。

そうでなくても、職場体験などというものは、楽しいものではない。海で遊んでいたりと、せつかくの夏休みなのだ、そういった事も楽しみたい。好きな人と、そんな事を楽しめるなら、それ以上の事はないだろう。

「不満そうだな、深谷君」

「え？ いえ、そんな事はないですよ」

心を読まれているかのようだ。毎度の事ながら、この人は鋭すぎる。

「君の不満もわかっている。そして、その不満ももつともだ。だが、安心しろ。全てを私に任せればいい」

中川先生は自信満々でそう言っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0640z/>

しゅーしょくぶ！

2011年12月16日02時46分発行